
ConcealedMemory

神無月帝婁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ConcealedMemory

【NZコード】

N3835A

【作者名】

神無月帝婁

【あらすじ】

とにかく逃げよう。いや、これは逃げじゃなくて旅の始まりだ。記憶をなくして途方にくれる女性いちわ。いちわに流されて自分の家に居候させる事になった沙希。どこかアンバランスな二人を描いた物語。

プロローグ

とにかく逃げよう。追いつかれないとこれまで、どこまでもどこまでも逃げる。あれ？逃げる？なにから逃げるの？なんで逃げなければならないんだろう。逃げる必要はどこにもないよね？そうだ、私は逃げるんじゃない。これは逃走なんかじゃない。私は旅に出るんだ。長い長い旅に出るんだ。私は手に入れるんだ。私の宝を。だからそ、う、これは逃走なんかじゃないんだ。

「またええええ！……」

その声に振り向くと二人の男が私を追いかけきていた。やばい！追いつかれる！こつちは自転車だつてのになんで追いつかれそうなのよ！あの人達足早すぎ！！もつすでに20分は走つてるつていうのに・・・恐ろしい体力だわ・・・つていうか本当に人間なのかしら・・・こうなつたらプロジェクトC作戦しかないわね・・・！まずは曲がり角を何度も曲がって敵の目を欺く。そしてわざとらしく別れ道に自転車を乗り捨てる。あまりのわざとらしさに追っ手の二人は自転車がある道とは逆に向かう。逆に私は自転車が乗り捨ててある方の道に逃げる！こんな事もあるうかと、この日のために考えに考えぬいた作戦！予想通りお馬鹿な一人は私がいる方とは違う道に行つたようだ。完璧だわ。完璧すぎるわ、プロジェクトC！やつとまくことができた・・・・まったく、しつこいにもほどがあるわよ・・・でも、これでやっと一歩踏み出すことができた。私を邪魔する人は誰もいなくなつたわ。これで思う存分・・・

ゴン！

なんてことだ・・・勝利の余韻に浸りながら歩いていたら電柱にぶつかってしまった・・・ううう・・・私ってドジだ・・・私はあまりの痛さにうずくまつてしまつた。額を抑えてうへへうへへ・・・と呻く。幸先良いやら悪いやら・・・とにかく、うずくまつていてもしょうがない。歩こう。私の旅はまだ始まつたば

かりなんだから！って・・・あ・・・あれ・・・？た・・・

てない・・・・・どうしちゃつたんだろう・・・つていうか・・・

の前が真っ暗くなってきた・・・・・あ・・・・

桜綺麗・・・

どうでも良いことを最後に考え、私はその場に倒れ込んだ。

目立

第一話

あまりにも頭が痛くて私は目を瞑ました。白い天井が見えた。見慣れない天井。

「ここは……どこ……？」

「お、目覚ました？」

私は起きあがつて声がした方向に顔を向けた。若い女性が床に座っていた。さつきまで本を読んでいたのか、しおりを本に挟み、テーブルに本を置いた。ウエーブのかかった髪。少々きつそうな印象を与える顔だが、目は優しそうだつた。どうやら私はベッドに寝かされていたらしい。見覚えのない人。部屋の中を見回してみた。やはり見覚えのない部屋。

「あなたは……だれ……？」

「ああ、ごめんね。私は一宮沙希。^{いちのみやさき}で、ここは私の部屋。あんたが道ばたで倒れてたから家まで運んだの。そのまま寝かせておくわけにもいかないし。本当は警察とか救急車とか呼ぶべきなんだろうけど、丁度携帯の電池がきれちゃって連絡できなかつたのよね。で、あんたの名前は？」

「あ、すいません……私は……」

名乗ろうとして私はそこで固まつてしまつた。なぜか自分の名前が出てこない。どうしちゃつたんだろう……

「どうしたのよ?」

「あの……あれ……えっと……あれ……? わからない……
・ 自分の名前 ……」

「え? もしかして、記憶喪失つてやつ? こんな所で寝かせておく場合じゃないじゃない。早く警察と病院いかないと」

そういうと沙希さんは外出をする準備を始めた。警察 …… 病院 …… そつか …… 私記憶喪失になっちゃつたんだもんね。なんかイヤだな …… 怖いし …… それに、なんだかよくわからない

けど行つてはいけないような気がする。なんでだろ？・・・？何か悪いことしたのかなあ・・・？

「ほら、なにしてるの？行くわよ」

「・・・イヤです」

私は警察と病院に行くのを嫌がる理由がよくわからない動搖がありながらも、しかしキッパリと拒否した。沙希さんが怪訝な面持ちで私を見た。

「はあ？何言つてるの？あんた、今自分が置かれている状況わかってるわけ？」

「わかつています。わかつていますけど・・・」

「・・・あのねえ、記憶喪失者の世話は医者と警察がすべき事なの。私はただの〇〇」。医者でも警官でもなんでもないの」

「わかつてます

「なら来なさい。私がついていつてあげるから

「イヤです」

「全然わかつてないじやないの！」

沙希さんの優しそうな顔がつり上がった。ものすごく迫力があつてかなり怖い・・・

「ごめんなさい・・・でも、なんかイヤなんです・・・病院とか警察とか・・・行つてはいけないような気がするんです。よくわからりませんけど・・・」

「はあ？なにそれ・・・？あんた、まさかヤバイことしたんじやないでしょ？」

「わかりません・・・」

「わかりませんつて・・・あんたねえ・・・！はあ・・・まあ、記憶がないんじゃしようがないわね・・・病院にもいかない、警察にも行かない、あんたは記憶が無くて自分が誰なのかもわからない。じゃあ、あんたこれからどうするわけ？」

そうだ・・・自分の家がどこなのかもわからない。警察、病院にも行かないなら私はどうすることもできなくなつてしまつ。私は

しばらく考え込んだ。その間沙希さんは何も言わず、じっと私を見据えていた。結局私の出した答えは……

「あの……私をここにおこしてもいいませんでしょうか……

?」

「はあ!? なんで私が……」

「お願いします!」

「だつて私はあなたと今日」

「お願いします! なんでもしますから!」

自分でもものすごくわけのわからない事を言いつらうと思つ。道で倒れているところを助けて貰つたあげくに我が儘を言いたい放題いつて、見知らぬ他人を家に住まわせてくれだなんて。しばらくの沈黙のあと、沙希さんは静かに口を開いた。

「わかつたわ。あなたをここにおいてあげる」

「え? 本当ですか! ?」

「ええ。ただし、条件がある」

「条件……ですか……?」

条件ってなんだろう……熱いで「なんでもします」って言つてしまつたけど、変なこととか要求されたらやだなあ……例えばまあ……ああいつこととか……

「そう。炊事、洗濯、掃除。家事全般をやる」と。それでいいなら……

「やります……やらせていただきます……あの……ありがとうございます! !」

私の変な妄想とは裏腹に、沙希さんの出してきた条件はとても簡単なものだった。沙希さんの田は二つの間にか元の優しさつな田に戻っていた。

「あの……もつ一つお願ひして良いですか?」

「ん?」

「私に、名前を付けてくれませんか?」

「え? 名前?」

「はい。やつぱり、呼び名があつた方が良いと思つんですね」

「そうね～・・・うーん・・・ポチ！」

「それって・・・たぶん犬の名前ですよね・・・？」

「むむ・・・・・じやあタマー！」

「それは猫だと思います・・・」

しかも安直というかベタベタです。と、眞おりと思つたがさすがにやめた。沙希さんは真剣に考えてくれているようだつたからだ。単にネーミングセンスがないのだろう・・・沙希さんはう～んう～んとうなりながら考えている。時々「ハチ」やら「ピーチヤン」などといつた単語が聞こえた。それらは全部ペットの名前だと思います。という突つ込みはこれまた自歎しておいた。それからしばらく考えたあと「あつ！」という声をあげて沙希さんは私を見て言つた。

「”いちわ”っていうのはどつ？」

「いちわ・・・ですか・・・？」

「そう。イチリンソウの花言葉つて知つてる？」

「いいえ・・・・」

「イチリンソウの花言葉は”追憶”。で、イチリンだと変だから、読み方を変えて”いちわ”。記憶を失つたあなたにはピッタリでしょ？どう？」

「いちわ・・・・はい。ステキな名前だと思います！」

居候も条件付きだけど了承してくれて、私に名前まで付けてくれた。沙希さんは一見きつこのような印象だけど、とても良い人みたいだ。

いひして私と沙希さんの、一人での生活が始まった。

「さて、始めますか！」

あげるわー！おほほほほほほほほー！ガガガガ！やつぱ私だつてやれ
ができるのよ！つて・・・・・ん・・・・？なんか今変な音がしたよ
うな・・・・・まさか・・・私変な物吸い込んだんじや・・・・そ
う思い、なにか無くなっている物がないか探してみる。といつても、
沙希さんの物はすべてきれいにしまつてある。となると私の物だが、
私が所持していた物なんてなにも・・・・・・・・・・・・ああ
ああああああああああああああー！ー！ー！ー！ー！大変なもの
を吸い込んでしまつた・・・！取り出さなきや・・・・私は大あわ
てで蓋を開けるボタンを押した。シユルルルルルルという音を立て
てコードが本体の中に吸い込まれた。・・・こっちのボタンじゃ
ない・・・・私はもう一つのボタンを押して蓋を開け、中から袋を
取りだした。袋の中を見ると、予想通りの物を吸い込んでいた。そ
う・・・昨日沙希さんから、買い物に行く時とかのためにもらつた
この部屋の合鍵・・・ああ・・・私つて相当ドジなんじや・・・
・そうしてじつくり一時間落ち込んだあと掃除を再開し、無事に終
えることができた。時計をみたらもう十一時半になつていた。ああ・
・・なんてこと・・・たかが掃除機をかけるだけで3時間もかか
つてしまふなんて・・・・なんか無駄に疲れたような気がする・・
・・・なんか眠くなつてきたな・・・・ちょっとだけ仮眠をとることにしよう・・・

・・・・・う・・・・・なんか夢を見ていた気がする。どんな夢
だつたつけ・・・・?だめだ、思い出せない。まあいか・・・・
今何時だらう・・・・?時計をみたらもう少しで6時を回る時間だつ
た。やばい・・・・10分か20分くらい仮眠する予定がバッち
りしつかり6時間以上も寝てしまつた・・・・夕飯の支度しなくち
やー冷蔵庫を開けて中身を確認する。白菜、えのきだけ、にんじん、
大根・・・・おお、いっぱいあるーよかつた・・・とりあえず買い物
に行かずには済みそうだ。さて、どうしようか・・・・なんだか今
日は冷えるから、お鍋にしよう。さて、いちわさんのドキドキクッ

キングの「コーナー」まずはお野菜を切りります。ザクザクブショウ・・・
・・イタイ・・・早速包丁で指を切つてしまつなんて・・・なんと
いうお約束・・・うう・・・・・・・とりあえず絆創膏を貼つて血を
止める。それからさらさら3回ほど指を切り、なんとか野菜を切る作
業が終了した。あ・・・土鍋用意してなかつた・・・・そういうえば
土鍋つてどこにあるんだろう・・・・まさかここまでできたりませ
んつていうことはない・・・といいな・・・・とりあえず一通り探
してみることにする。どこだーどこだー・・・下の戸棚から探して
みるが見つからない。となると上の戸棚か・・・・身長の低い私に
はちょっと高い位置だが、背伸びをすればなんとか届きそうだ。戸
棚を開けると、奥の方に土鍋があるのが見えた。頑張つてそれを取
り出そうとするが、手前に両手鍋があつてなかなか取り出せない。
なんとか土鍋に手が届く。手が届いたことにホツとしたら力が抜け
てしまつた。そして・・・・

ガシャガシャーーーン!といつ音を立てて戸棚に入つていた数個の
鍋が落ちた。さらに

「ただい・・・・・ま・・・・・・・?」
「ナイスタイルミングで沙希さん」帰宅・・・
「・・・・なにこれ・・・・?」

沙希さんが無表情で私に尋ねた。

「あは・・・あはははははははは・・・・
もはや笑うしかない。笑つて誤魔化すしかない・・・

「いちわさん、これはどういうことですか?」

ああ・・・・沙希さんの顔が怒りに染まつていく・・・・しかも
なぜか敬語・・・・」・・怖い・・・

「え・・えつと・・・お鍋を作りうと思つて、土鍋を取り出そ
としたら・・・ガシャガシャーーーンつて・・・・

「それで?」

「あ・・・・えつと・・・・『めんなさい』

「よろしく」

やつこつと沙希さんは散らかした鍋を止づけ始めた。やがて沙希は
つきの怒りは私がドジをした事ではなく、笑って誤魔化そうとしたことに向けられたものらしい。

「まあ、こんなことになつてゐんじゃないかつて思つたしね
グサッ！－沙希さんの言葉をつけ、本日何度目かになる落ち込み
モードに私は陥つた。うつ・・・・・

第二話

日曜日。いちわがうちに来て一週間がたつた。相変わらずいちわはドジばかりを踏む。しかし、それもだんだんと少なくなってきた。要領が悪いというか、ただやり方を知らなかつただけなのだろう。料理の仕方もわからなかつたいちわ。元々料理も掃除もやらない子だったのか、それとも・・・記憶と共に忘れてしまつたのだろうか？この一週間、テレビや新聞などで行方不明者の搜索願が出ているかなどチェックをしているがそれらしい記事等はなかつた。警察を恐れているという観点から犯罪者なのではないかという予想もし、犯人が逃亡している事件、事故などもチェックするようにしてみたが、そういう物は最近起こつていないようだつた。まあ・・・そんなことできるような子には見えないけど・・・早くこの子の記憶を戻して、家族の元へと返さなければと思ひ反面、このままで良いかなと思つてしまつていてる自分が最近現れた。だがそれは私個人の、一人よがりな想いでしかない。この子の親族、友人はとても心配をしているだらうから。でもせめて・・・この子の記憶が戻るまでは・・・

「ねえ、いちわ。今日買い物に行こうと思つのよ」「私は朝食の片づけをしているいちわに声をかけた。

「買い物？」

いちわが洗い物をする手を止めて私に尋ねてきた。

「そう。いろいろと買いたい物があるのよ。いちわも一緒に行く

？」

「行く！」

とてもうれしそうにいちわがそう返事をした。それから「早く洗い物終わらせなきや」慌てて手を動かし始めた。と

「ガシャーン！」

という音がしたので台所を見ると床に割れた皿の破片が散らばつ

ていた。

「あ～…………」

と、苦い顔をしていちわが呻いている。本田のお買い物リストに皿一枚と追加することが決定した。

落ち込みモードに陥つたいちわをなだめることが30分。やっと立ち直つたいちわと私は片づけを終わらせて、外出の支度をして外へ出た。雲一つない快晴。絶好のお出かけ日和と言えるだろう。4月も中旬となつた現在、桜は徐々に散り始めていた。もうちょっと時期が早ければ花見ということもできたであろうに。非常に残念だ。そんなことを考えながら私たちは近所のデパートへ向かつた。

「ところで何を買うの？」

デパートに到着し、せつかくだから一階から適当に見て回りつつということになり、食器売り場を見ていた時にいちわが私に尋ねてきた。

「とりあえずここ一週間でいちわが割つた食器類ね」

「あぐ・・・・」めんなさい

「あとは、いちわの服とかかな」

「え？」

いちわがキヨトンとした顔をして私を見る。

「あんた、荷物一つなしで倒れてたから、服それしかないでしょ？しかも地味だし」

「地味・・・！？」

「だからいちわの服も・・・って、お～い、聞いてる？」

いちわがその場に両手をついてへばり込み「地味・・・地味・・・

・」と咳きながら落ち込みモードに入った。他の買い物客からの奇異の目が突き刺さる。子供が私たちの方を指して「ママー、あのお姉ちゃんにしてるのー？」と母親らしき人に尋ねているのが聞こえた後に「しー見るんじゃありません！」という声が聞こえた。ああ・・・・・

「ちよつといちわ

「そうよね・・・そうよね・・・沙希ちゃんなんかすっ」「いオ
シャレさんで華やかなのに・・・」

「おーい、いちわー」

「なんか私つてばこんな・・・」

「いーちーわ!」

「私つて確かヒロインだつたよね・・・?」

・・・全然聞いてない・・・30分くらい放置してれば勝手に立ち直るのだろうけど、さすがにここじゃそんなことできるわけがない。とにかく、褒めちぎるなりなんなりしてなんとかしていちわをたちなおらせなきや・・・と、いう風にするのが通常の私のやり方だが、落ち込みモードに入つたいちわをこの方法を用いて立ち直らせるには10分ほど要する。いちわが落ち込みモードに入つてすでに5分が経過している。しかも心なしか野次馬ができあがっているよう気がしないでもない。時は一刻を争う!他人のふりをして放置するというわけにもいかないし・・・・・結局出た結論は、無理矢理いちわを起きあがらせてその場から全力で逃走するという、なんとも強引な手だった。このいちわの落ち込みモード、なんとかして治せないものだろうか・・・・・

デパートの階段。大概の客はエレベーター、エスカレーターを利用するためここに来る人は非常に少ないはずだ。予想通り誰一人としていなかつた。デパート内の喧噪からやや離れたここで一息つく。いちわはまだ何事かブツブツと言つて落ち込みモードに入つていた。まあ、ここなら一日にもあまりつかないし、放つておいても良いだろつ。

「そうよ・・・そうよね・・・!それでいくしかないわ!!--」

一体どんな経緯をたどつてそれでいくしかないという結論がでたのか解らないが(というか一体なにをするつもりなのか・・・)どうやらいちわの中で解決したらしい。

「やつと立ち直ったわね。まったく、あんたは人の話を最後まで聞かないで勝手に落ち込みモードに入つて」

「『めんなさい』・・・」

「まあいいわ。とりあえず今日は、いちわの服とかを買おうと思つてゐる。今まで私のを貸してたけど、私といちわじゃサイズも違うしね。いちわも自分が欲しいだらうし」

「え？ いいの？」

「家事をしてるバイト代だと思つて受け取つておきなさい」

「ありがとう、沙希ちゃん」

「それじゃ、こんなとこに留てもしょうがなくから行くわよ」

「うん！」

落ち込んだと思ったらすぐに笑顔になる。表情が口々口々と変わつて本当に見ていて面白い。今までの私の交友にはなかつたタイプ。こういつのも悪くはないと思つ。私たちは衣類コーナーを田指して歩き出した。

一通りの買い物を済ませ、私たちは帰路についていた。たかがデパート内をいろいろ回っているだけでも、テナント一つ一つじつくり見て回つていつたら帰る頃にはすっかり夕方になつていた。二人共買い物袋を両手いっぱいに持つてゐる。今日口漫画やアニメでもあまり見かけない光景だと思う。あれやこれやと買つていつたら気付くところいう状況になつっていた。本日使つた金額は・・・考へない事にしておこう。でもまあ、私も楽しかつたし、いちわも喜んでいるみたいだからまあいいか。そういえば今日の夕飯の事を考えていなかつた。冷蔵庫の中には何もなかつたはずだ。レトルト食品あまり好きではないから元からうちにはない。出前でも取ろうか、それともどこかで食べていこうか・・・うん・・・

「ねえ、いちわ」

私はいちわに意見を求めるため声をかけた。が、しかし隣を歩いてるはずのいちわの姿がそこにはなかつた。振り返つてみたが誰も居ない。

「いちわー？」

私は誰も居ない空間に向かつてもう一度いちわに呼びかけてみた。

「沙希ちゃん！こっちこっちー！」

かなり後ろの方の曲がり角からいちわが顔を出し返事をした。私はいちわの居る所まで行き、

「あんた、そんなところでなにやつてんの？」

「あのね、猫がいるのー！」

「猫？」

いちわの後ろをのぞき込むと一匹の猫が毛繕いをしていた。

「猫だよ猫！かわいいー！」

全体的に灰色っぽい色をしている。ロシアンブルーだらうか？いや、よく見ると尻尾が黒と灰色のしましまになつている。雑種のよ

うだ。首輪を着けていないが野良猫なのだろうか。そんなことを考
えている私の傍らでいちわは猫を撫でている。猫の方もいちわに完
全に気を許しているらしく、いちわにされるがままに撫でられ、氣
持ちよせねつて田を細めてこる。猫を撫でながらいちわが「いや
いや～～」と謎の言葉を発している。どうやら
猫と会話（？）しているらしい。まったく、本当に面白い子だ。

「いちわ猫好きなの？」

「うん！沙希ちゃんは？」

「う～ん・・・嫌いじゃないけど私は犬派かな。なんか猫って
自由奔放で気分屋だし」

「はあ～・・・沙希ちゃんわかつてないな～・・・わかつてな
いよ沙希ちゃん！」

「なんで一回這つの・・・？」

「猫への愛つていのうのは無償の愛なのよーー！」

「はあ・・・無償の愛ねえ・・・」

握り拳を作つてまで力説していくいちわ。無償の愛と言われても
私の猫に対する愛情が上がるわけでもなく・・・いちわは「時代
は猫よ！ねえ～猫さん」と猫に語りかけ、また戯れ始めた。私は
その姿をただ眺めていた。

「そうだ！沙希ちゃんも撫でてみなよ！」

いちわはそういうと猫の前からちょっとだけずれて私の入るスペ
ースを空け、ほらほら！といつて私を促した。私はいちわの言われ
るまにいちわの空けてくれたスペース、猫の前に座った。つまり
はそう、私も猫に興味が無いわけではないのだ。野良猫は警戒心の
強い動物だからそつと猫の頭へと手を伸ばす。これだけ近くにい
て警戒心が強い猫だとは思えないが、まあ念のために。猫に手が届
くまであと5センチといつとこりで猫は急に起きあがりピューッと
遠くに走り去ってしまった。

「あ～あ・・・猫さん行っちゃった・・・」

いちわが心底残念そうに言つ。

「まあ、猫だし、そんなもんだわね」

努めて冷静に私はそう言つたが、内心はちょっとだけショックだつたりもした。そう、本当にちょっとだけ・・・

「きっと沙希ちゃんの猫さんに対する愛情が足りなかつたからだよー。」

「そんなもんかしらねえ・・・」

「絶対そうだよ！」

なんの根拠があつてそんな自信満々に言えるのか・・・。いちわは「やつぱり愛よ、愛！」などとまだ言つていた。でもまあ、根拠はなくともなんとなく納得できてしまつような気がするから不思議だ。とりあえずいつまでもここにいてもしょうがないので私はいちわに「帰ろうか」といつて促し、再び帰路に着くために踵を返した。するとそこに黒いスースを着て、サングラスをかけた一人の男が立っていた。私は無視して、半分いちわをかばうように男達の横を通り過ぎようとした。が、

「ちょっと待ちな」

と、呼び止められた。ああ・・・。「んのにからまれるなんてめんどくさい・・・」

「ナンパならお断りよ」

「用があるのはお前じゃない」

そういうと人がいちわの方歩み寄り、

「私たちと一緒に来て貰おうか」

と、言って男はいちわの手を掴もうと手を伸ばした。

「ちょっと！なんのよあんたたち！」

私はそういうと男を止めに入ろうとした。が、もう一人の私の前に立ちはだかった。

「あの子はお前のようなヤツとは居られる存在ではないのだ」

そう言つて私を取り押さえてきた。

「なにすんのよ・・・！」

私はとっさに身を翻し、私に掴みかかるうとしてきた男の鳩尾の

部分に思いつきり回し蹴りをくらわせてやった。男は低い呻き声を上げてその場に倒れた。

「き・・・貴様あああ！」

仲間が倒された事に憤怒し、いちわに掴みかからうとしていた男が私に襲いかかってきた。私は男の懷に飛び込み、男の腕をつかんで運動法則を利用して、男を投げ飛ばした。壁に背中から衝突し、男はそのまま動かなくなつた。まあ、骨が折れたりとかはしていないだろう。合氣道をやっていて良かった。

「いちわ行くよ！」

私はそういうといちわの手を取つて走り出した。走りながらいちわが

「沙希ちゃんかっこいい！」

と、場違いな台詞をはいた。まったく、どこまでもマイペースな子だ。自分に身の危険が降りかかるて居たことに気が付かなかつたのだろうか・・・？走りながらふと買い物袋の事が気になつたが、すぐに一人ともしっかりと両手いっぱいに持つていて我ながら少し呆れた。私たちはマンションまで全力疾走した。走るのに夢中で私は気が付いていなかつた。いちわが浮かない顔をしながら走つていたことに。

自宅まで全力疾走した私達は一人して床に倒れ込んだ。が、暑さに耐えきれず私はすぐに起きあがり、窓を全開にする。夕暮れ時の涼しい風が部屋に入つてくる。それに満足した私は再び床に倒れ込んだ。一人ともしばらく何も言葉を発さないまま黙つていた。十数分ほどした所でお互いの呼吸も戻つてきたので私は口を開いた。

「なに・・・あれ・・・・・・？」

さつき私達を襲つてきた二人組について、私はいちわに尋ねた。

「んー・・・・・わかんない」

まあ、当然と言えば当然か。いちわには私の所に来た時以前の記憶がないのだ。私の所に来てからは家事をしているだけでどこにも出かけることはない。買い物も一人で行かせるのが不安だったから私と一緒に一人で出かけるようにしていた。あの二人組、明らかにいちわをいちわと解つていて、いや、いちわの正体が、いちわが本当はどうこの誰なのかわかつていて私達に接触してきた。しかも私のような人間とは居られる存在ではないと言つた。今更になって不安に思う。この子は一体何だろう?どうして記憶をなくしたのか?どうしてあんなやつらに狙われているんだろう?考えれば考えるほどわからないことばかり。やはり何かの事件に巻き込まれたのではないか?逆にこの子が首謀なんて事はないだろうか?いや、そんなわけはない。まだこの子と暮らし始めて間もないけど、それでもわかる。この子は事件を起こすような子じやない。そんなことができるなんて到底思えない。じゃああの一人はなんだつたのだろう?・・・・だめだ、堂々巡りをするだけだ。でも考えずにはいられない。この子は一体・・・・・?

「風が気持ちいいねえ♪・・・・・」

私が思考に耽つている隣でいちわが目を閉じて気持ちよさそうに言つた。その脳天気さにちょっとむつとした私はいちわに詰め寄つ

た。

「あんた……あの二人について何も思わないわけ……？あんたの事知ってる風だつたし、あんたの無くした記憶に関する事かもしれないのよ？」

「ん？う～ん……まあ、なんとかなるよ」

「うん、なるなる。と、もう一度繰り返し、いちわはまた清々しい風に身を任せ、はあ～気持ちいい～・・・と呟いた。当の本人がこんな感じで自分ばかりがあれこれ考えてこることがばかしくなり、私は不安を残しながらも思考を止めることにした。そして私もいちわ同様に夕暮れの心地よい風に身を投じた。それからふと思い出す。

「そういうえば今日夕飯ないから」

「え！？なんで！？」

「買ひ忘れ。冷蔵庫の中にも何もないし」

「じゃあレトルト食品とかは！？」

「そういう物はうちになじってあなただつて解つてるでしょ？」

「むう～～じやあどうするの？は！まさか今晚は抜き！？」
いちわがこの世の終わりであるかのような顔で大げさに叫ぶ。これで良い。いつものやりとり。いつもやつて今日の出来事は忘れてしまえばいい。

「あんたがそれで良いなら良ければど？」

「う～～・・・沙希ちゃんが意地悪する・・・」

「ふ・・・あはははははは」

拗ね始めたいちわがおかしくて、堪えきれずに笑つてしまつ。

「あー！沙希ちゃんひどい！笑つた！」

私は懸命に笑いを堪え、「めん」「めん」と適当に謝つた。いちわはまだ不満そうな顔をしていたが、私が外食と出前どっちがいい？と聞くと途端に笑顔になり、間髪入れずに出前を選択した。

「なにがいい？」

「ピザ！」

またも即答するいちわ。その回答の早さにちょっとびっくりしていると、今日の新聞広告を取り出し、ピザ屋の広告を指してこれを食べたいって思つてたんだよ～と満面の笑みを浮かべた。私はいちわの「」所望通りの物を注文する。そうだ、これで良い。これで良いんだ。こいつやつて少しずつ今日の事を払拭していけばいい。不安も氣にならなくなるくらいに楽しい日々を送ればいい。この時の私は何故か樂觀的で、この楽しい時間が毎日毎日、いつまでも続いていくと信じて疑わなかつた。いや、不安を拭い去るために無理矢理不安要素を樂觀視していただけなのかもしれない。この楽しい時間も、そうだつたら良いという希望を現実の物にしようと躍起になつていただけなのかも知れない。この楽しい時間が、いつまでもいつまでも・・・・。願い続けていればいつか願いは叶う。そんな物は子供じみた思考概念、自己暗示でしかない。そうと解つても、今はそれにしがみついていたかつた。不安の種が発芽してしいませんよううにと、ただ願うだけ。

「」は？」誰かの家の中？見たことあるよつた無いような・・・思ひ出せない。そこでふと思ひ当たる。せつだ、これは夢の中だ。と、いうことは私はこの場所を知つてゐる。でもわからない。」は？」であつただらう？

「桜」

後ろから声がしたので振り返る。そこには中年の男性が立つていた。風格から威厳がにじみ出でている。この男性も見覚えが・・・ある・・・・？

「なんでしょうか、お父様」

自分の考え方ことに反して、私の口からはなんの躊躇もなくその言葉が出た。お父様・・・この人は私の父親・・・？そして「桜」という呼びかけに答えた私。私の本当の名前は桜・・・

「学校を自主退学してきたそうじゃないか。一体どういuffつもりなのだ？大学も出すにどうするというのだ？」

「別にどうというつもりはありません。ただ、私はお父様の敷いたレールの上を走りたくないだけです。私は私の考えで……」

「生意気を言つんじゃない！お前のような世の中を何も知らないような子供が考えて行動ができるほど世の中は甘くないのだ！お前は私に従つていれば良いのだ！お前の行動は浅はかだ。学校を中退するなど、綾小路家の恥だ！」

「綾小路家の規定など関係ありません！私は私の道を道を歩みます！」

「だからそれが浅はかだと言つているのだ！何度言えば解る？お前はただ私の言つことに従つておれば良いのだ！」

「それがイヤだと言つているのです！」

「・・・そんなに我を貫き通したいと言つのなら、この家から出て行きなさい。勘当だ」

「わかりました、出て行きます。二十一年間ありがとうございました」

それだけ告げて私は踵を返し、家を出て、愛用の自転車にまたがり走り出した。どこへ行くという訳でもなくただ闇雲に。しばらく走つた所でお父様の秘書の人と執事の人私が追いかけってきた。

「桜お嬢様！」

「桜様、お戻り下さい！」

あの二人が追いかけてきたと言うことは私を連れ戻せというお父様の命令が下つたのだろう。自分から出て行けと言つたくせに。私は一人を無視して、速度を上げて自転車を走らせ続けた。この先にある、誰に強制されたわけでもない自由な自分の人生を夢見て。桜の咲き乱れる街頭を走り抜けた。視界に薄い靄がかかっていき、夢はそこで終わった。

なんだか悪い予感がした。言い知れぬ胸騒ぎ。虫の知らせというやつだろ？昔から悪い予感はよく当たる人だつた。当たつて欲しくない事に限つて特に。今の私にとつて良くないこと。思いつくのは一つだけ。昨日からの不安感の延長だという打算的な考えは今私にはできない。今日は仕事は休むことにしよう。

なんだかいちわの様子がおかしい。食事をしている時も後片付けをしている時も、いつもならいつもなら話をしたり、騒いだりしているのに今日は妙に静かだ。おかしい・・おかしい・・昨日から歯車が狂つてしまつたようにそこにあつた日常が変わつていく予感。いや、单にいちわの体調が良くないだけなのかも知れない。ほら、顔もなんだか微妙に強張つているようだし、心なしか顔色も良くないうに見える。そんな打算的で良いのか私？そうやつてそこにある現実から目を背けようとしているのではないか？

「どうしたのいちわ？」

「え？」

「なんだか物静かだから。体調悪い？」

「うん・・・ちょっと・・・」

「だつたら薬呑んでゆつくり寝なさい。今日は私仕事休みだから」正確には休みではなく休んだのだが、その辺りは伏せておく。そんなものはどつちでも良いことなのだから。

「ううなんだ・・・じゃあ、丁度良いかな」

「ううね。家事は私が全部やるから、あなたは大人しく寝てなさい」

「そうじやなくて・・・」

そうじゃない？なにがそうじやないんだ？いちわの言つているこの真意がつかめない。真意をつかもうと必死に考えようとする。それと同時に考えてはいけないと本能が告げる。そして迫り来る言

いようのない不安感。

「あのね、沙希ちゃんに大事な話があるの」
大事な話・・・大事な話つてなに・・・?いや、もう誤魔化すのは止めるんだー富沙希!もう、どんな話があるのか、大概予想はついているんでしょ?逃げるな。目を背けるな。それでも私の予想している事と違う事をいちわが話してくれる事を望んでいる。それとしても確率の低い事ではないか?それでも、わずかでも可能性があるのなら、やはりそれにすがりたい。

「話つてなに?」

自分の声が妙に重くなっている事が自分でもわかる。場の空気が一気に重くなる。私は今一体どんな顔をしているのだろう?平静を装う事ができているだろうか?いや、あんな声を出してしまったのだ。装う事なんかできているわけがない。

「あのね、私・・・」

そこでいちわは一度言葉を切つた。私は何も言わずにいちわの次の言葉を待つた。しばらくの沈黙。いちわが意を決したように口を開き、言葉を発しようとしたその時、玄関のチャイムが鳴った。こんな朝早くから誰だろ?立ち上がりつて玄関に出ようとするいちわを「私が出る」と一言言つて制し、私は玄関に出た。チーンはかけたままで、鍵を開けてドアを開く。そこには中年の男性が立っていた。

「朝早くから申し訳ありません。私、綾小路と申しますが、こちらにいちわという女性が居ると思うのですが?」

全身から血の気が引いていくのがわかる。居ませんか?ではなく居ると思うのですが?と言つて訪ねてきた。これはもういちわがここにいることを確信している。この人は何者?

「お父様!」

いつのまにか後ろにいちわが立つていた。気配がまったくわからなかつた。いや、それほどまでに私が呆然としていたのだろう。そんなことより、今いちわ・・・この人の事お父様って言った・・・

・?といつことば、やつぱり・・・やつぱり・・・

「いちわ・・・あんた記憶が・・・」

戻ったの?そこまでを口にする事はできなかつた。だが私の言おうとした事は伝わつたらしく、いちわが小さく頷いた。ああ、やはり悪い予感は当たつてしまつたんだ。こうしていちわの父親も迎えに来ている。そうだ、もう私達の一人での生活は終わりなのだ。

「桜、家に戻りなさい」

「今更そんな事を言うのですか?お父様が出て行けと言つたのではないですか?」

いちわの父親がその言葉で黙つてしまふ。沈黙が続く。その沈黙を破つたのは私だつた。

「あの・・・とりあえず中にお入り下せ。」JR、マンションですし、立ち話もなんですから・・・」

そういうて私はいちわの父親を部屋の中に招き入れた。いちわはびっくりしたような顔で私を見て何かを言いたそうにしていたが、私はそれを無視した。

私の隣にいちわ(桜と言つべきだらうか?)、テーブルを挟んで向かいにいちわの父親(名を綾小路庄造といつらしげ)という位置関係で私達は座つてゐる。庄造さんが自分の名前を名乗つて以降、誰も口を開かない。かれこれ十分くらいはみんな黙り続けている。重い沈黙、重い空氣。

「桜、家に戻りなさい」

その沈黙を破つて庄造さんが口を開く。先ほどと同じ台詞。

「ですから、私は家には戻りません。そもそも出て行けとおつしやつたのはお父様じやないですか」

「まさか本当に出て行くとは思わなかつたのだよ」

「そう申されましても、私の意見は変わつておりません。私は私のやりたいようにやらせていただきます」

「だから、お前のやりたいこととはなんだ?」

「まだわかりません。でも、少なくともお父様の言つとおりに従つてゐる事でないことだけは確かです」

庄造さんの顔が怒りに染まつていぐ。気分を落ち着けようと必死で息を整えているのがよくわかる。桜は表情を変えないままじっと父親の姿を見据えている。いつものような雰囲気はまるでない。ここにいるのは紛れもなく、私の知つてゐるいちわではなく、綾小路桜なのだ。庄造さんが気分を整え終わると、考え込むようになつてしまつた。だがすぐに意を決したように口を開いた。

「…………わかつた。そこまで言つのならお前の好きなようにするが良い。私ももう何も言わない。しかし、家には戻りなさい。いつまでも一宮さんのご自宅にお邪魔しているわけにはいかないだろ」

庄造さんはそう言つと私に同意を求めるように視線を私の方へ移す。桜も私に視線を注ぐ。そんな事無いです。私は迷惑ではないですからこの子はここに置いて上げくださいと、言つて欲しそうな眼差し。期待と不安の入り交じった視線。もちろん私だって桜と一緒に暮らしていきたい。あの楽しい毎日をいつまでも続けていきたい。

「そうですね、いつまでも居られても私も困ります」

自分の考えている事とは正反対の言葉が口について内心自分でもびっくりしている。しかし、その声色は冷静そのものだった。桜が目を見開き、驚いた顔を見せた次の瞬間一気にその顔を曇らせる。

「元々桜さんの記憶が戻るまでという話でしたし、こうしてお父様自らが迎えにいらしたのですから私が桜さんをここに置いておく理由はありません」

なんでこんな事を口走つてゐるんだろう?私はこんな事を言いたいんじゃない。

「桜、支度をしなさい」

「ここに私の荷物はありません。何も持たずに行きましたか

そう言つて桜は庄造さんの後に付いて玄関に行く。私も見送りをするためにその後を追う。出て行く直前で桜は一度私を振り返った。

「沙希ちゃん、この一週間ありがとう。どこの誰とも解らない私をここに置いてくれて。凄く嬉しかった。沙希ちゃんが付けてくれた「いちわ」っていう名前もすごく好きだった。たつたの一週間だつたけど、すごく楽しかった。ずっとこんな時間が続いたらつて思つてた。失敗ばかりで沙希ちゃんに迷惑かけてばっかだつたけど、いつかテキパキなんでもこなせるようになつて、沙希ちゃんをあつと言わせたいって思つてた。でも、それはもう叶わないんだね。仕方ないよね。沙希ちゃん、本当にありがとう。楽しかった」

桜はそう言つて踵を返し歩き出そうとする。

「桜！」

私はつい呼び止めてしまつた。なんと言ひべきなのか、そう言ひ事は何も考へないまま。私は、何を言ひつもりなの？桜はもう一度振り返つた。桜はちょっと怒つたような顔をしていた。私はその顔に罪悪感を感じた。そうだ。私は桜に怒られて当然なのだ。桜のあの助けを求めるような視線を無視したのだ。私は桜を見捨てたような物なのだ。

「沙希ちゃんには・・・桜じゃなくて、いちわって呼んでほしいな」

しかし、桜から出た言葉は予想もしていなかった。「いちわって呼んでほしい」・・・か

「うん、解つたわ桜・・・じゃなくて、いちわ」

そういうといちわは微笑んだ。その微笑みはぎこちなく、笑みよりも寂しさの方が多く滲み出でていた。

「なに？沙希ちゃん」

私もいちわと同じ気持ちだよ。私もいちわと一緒に暮らしていきたい。ずっと二人で楽しい時間が続いていつたらつて思つてたよ。そう言いたい。でも言えない。さつきいちわの助けを求めるような視線を裏切つたじゃないか。それなのにこんな事を言つのはムシが

良すぎるのではないか？むしろ、そんな言葉は真実味を持たない、ただの社交辞令的言葉としていちわには受け取られるだろう。いくら私が本心だと言つたといひで、さつきの私の台詞から考えれば当然の事。私はなんで・・・どうしてあんな事を言つたんだろう。悔やんでも悔やみきれない。いちわが私の言葉を待つていてる。何か・・・

- ・早く何か言わなくては・・・
- 「・・・・元氣でね」

「うん」

他にも言つべき事がいろいろあるだろ？・・・私にはそれだけしか言つ事ができなかつた。庄造さんが「桜」といちわに呼びかける。いちわは踵を返し、歩み出す。最後にいちわはもう一度振り返りついた。

「ばいばい、沙希ちゃん」

今度は私はなにも言つ事ができなかつた。いちわが遠ざかって行くのをただ黙つて見ている事しかできなかつた。

「ねえ、いちわ今日のお昼・・・」

そこまで言つて思い出す。そうだ、もうここにはいちわは居ないんだ。すっかり一人での暮らしが自然になつていたため、つい声をかけてしまう。一人に戻つて思い知る。いや、解つていた事だ。いちわと一人で暮らしていた事はなんと楽しい事だつただろう。そういえばいちわ、昨日買った服とかも全部置いていったな。今度届けてやろうか、なんてことも一瞬思つたが、いちわの実家がどこなのかを聞いていなかつた。こちらからは何もできない。いつかいちわがここに来た時の為に大切にしまつておこう。そう思うが、そんな日は来ないのではないかとも思つてゐる。でも捨てきれない。それはつまりいちわとの思い出を捨てる事になる。そんなことはしたくなかつた。その時携帯が鳴つた。一瞬いちわからではないかと期待するがディスプレイを見てそんな淡い期待も一瞬で消える。父からだつた。

「もしもし？」

「私だ」

父はいつものように声を低くして大好きな刑事物ドラマの俳優の物真似をしている。いつも事だが今の私にはこの父のお遊びが腹立たしくてしようがなかつた。こっちの気も知らないで・・・

「なに？」

私は思いきり不機嫌な声で応対した。よくよく考えれば父が私の心情を察せるわけもないのだから八つ当たりも良い所だ。

「お前次の日曜は何か用事が入つてゐるか？」

父は明らかに不機嫌な私の声を聞いてもなんとも思わないようだ。相変わらずのマイペース。これもいつものこと。私が不機嫌であるが上機嫌であろうが構わないのだ。それでもまあ、不機嫌になつてもしようがないので、努めて平静を裝つて父との応対を続け

る。

「空いてるけど、なに?」

「うちの会社との提携会社社長たちとパーティをすることになつてね。お前にも参加してもらいたいんだ」

私の父は会社をいくつか経営している、いわゆる大企業の社長だからこうじつた提携会社の人とのパーティというのはよく開かれる。私は社交辞令全開なああいつ空間は好まないのだが、断り切れずにもたまに参加する事になる。今回も先に予定を聞かれて、しかも空いていると答えてしまっている。今更やつぱり予定が入っているとも言えないで承諾するしかない。私に時間と場所を告げると父は早々に電話を切つた。いつまでもこんな滅入つてのも私らしくないし、気分転換にもなるだろう。イヤな気分になるだけかもしれないけど、それでも、今のこの気分を紛らわせる事はできるだろ。

日曜日、私は指定された場所に時間通りに到着した。

「ごきげんよう、沙希さん。お美しくなられましたね」

「篠崎のおばさま、ごきげんよう。おばさまも相変わらずお美しいでござりますね」

精一杯の作り笑いを浮かべて社交辞令をする。どうやらこの場には見知った顔がほとんどらしい。私は適当に顔見知りに挨拶を済ませる。「ごきげんよう、さん本日もステキなお召し物ですね。どちらのドレスですか？ステキな指輪でござりますね。いえいえ、私などそんなに素晴らしい物ではございませんわ。やはり疲れる場所。社交辞令の嵐。私はひとしきり社交辞令をした後、では、「ごきげん」と言うとつてその輪から離れる。どこかに休めるような場所はないだろうか？そう思い歩き出す。その時、誰かに呼ばれたような気がして辺りを見回す。しかし見知った顔はその周りにはなかつた。気のせいかと思い、また歩き出そうとしたが、また誰かが呼ぶ声が聞こえた。

「沙希ちゃん！」

氣のせいではない。確かに聞こえた。懐かしい声。懐かしい呼び方。まだそんなに時間は経っていないはずなのに、もう何年も会つていなかのような錯覚すら覚えた。私はこみ上げる感情を抑えきれずに、勢いよく振り返る。そこに立っていたのは・・・

H&Rローグ（後書き）

Concealed Memoryはいかがだったでしょうか？

前回のDeath Desireがちょっとバッドエンドっぽかつたので、今回はハッピーハンドにしたつもりです。相変わらずの文章力のなさに加え、今回は見事に沙希もいちわも動いてくれなくて大変でした。

最後まで本作品を読んでいただいた皆様、ありがとうございました。
感想なんかをいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835a/>

ConcealedMemory

2010年10月26日03時20分発行